0-1

関係代名詞が使えないと……
子供の英語でよいのですか？

[1]「受験英語」は本当に役立たないのか？

なぜ、関係詞が必要なのかを語る前に、ぜひ皆さんに考えていただきたいことがあります。それは……

「文法」＝「文法用語」だと勘違いしていませんか？

日本の英語教育では、今まで、「実用英語」の対極にあるものとして、「受験英語」、特に「文法」が完全に悪玉にされてきました。しかし、本当に「文法」が、悪いのでしょうか？

私はかねがね、「文法」を日本人が英語の苦手である元凶であるかのごとく、批判する人（英語教師も含め）は「文法」と「文法用語」とを混同しているのではないかと思っています。文法批判主義派はきまってこのように言います。

「我々日本人は、文法などわかっていなくても日本語を読み書きできる。同じように、英語のネイティブスピーカーも英文法など知らなくても話はできるし、読み書きできる。つまり日本人が英語ができないのは、英語教育における、文法中心の指導のせいである。云々……」

しかし、本当にそうなのでしょうか？ 我々日本人は日本語の文法を知らずに、日本語を読んだり書いたりできているのでしょうか？ そんなことは決してないはずです。

例えば、皆さんが日本語教師でもないかぎり、「が」と「は」の使い分けのルールを文法的に説明しろといわれても、たいていの人はできないのではないかと思います。しかし、昔話のおなじみの冒頭部分、

「むかしむかし、ある所に、お爺さんとお婆さんが住んでいました」

に対し、

「むかしむかし、ある所に、お爺さんとお婆さんは住んでいました」（？）

という文を聞いたら、ほとんどの人は違和感を持つのではないでしょうか？ また、この活用形は「未然形」か「連用形」かときかれて、すぐには答えられなくても、こんな言い方はおかしい、などと反射的に気づくはずです。

これはなぜでしょうか？ それは、我々日本人がちゃんと日本語の文法を身につけているからにほかなりません。

同様に、英語のネイティブスピーカーが「この不定詞は何用法か？」「この-ingは動名詞か現在分詞か」というような日本の入試問題に即答できなくても（いや、1時間かけても解答不能でも）、彼らはto Vの正体はわかっているし、to Vを用いるべきかVingを用いるかの区別も同様にできます。これも彼らが「英文法」を知らないのではなく、頭の中に体系的な英文法の理解ができているからにほかなりません。

つまり、**用語を使って説明できないからといって、文法が頭に入っていないと見なすのは、誤解というか短絡的な発想**であることをわかっていただきたいのです。

しかし、先のような論調が幅を利かせるようになり、とうとう高校の英語のカリキュラムから、「文法」（昔でいう「グラマー」！）がなくなり、代わりに「オーラル・コミュニケーション」が導入されるようになりました。そして、日本人の英語力が飛躍的に向上したかというと、残念ながら……。

私は別に、文法推進派でもなんでもありません（というより、そもそも、文法だ会話だという色分けをすること自体がナンセンスだと思うのですが）。要は英語らしい表現、子供の使う片言レベルではない英語を使うのに必要なことを、ただ皆さんに知っていただきたいだけなのです。